

友達と協力して遊べる子を目指して ー協同的な遊びから得られる非認知能力の向上とその発展性を願ってー

前佐倉市立佐倉幼稚園長 古嶋 美文



1 はじめに

本園は大正2年に創立し、今年で107年目を迎えた伝統ある幼稚園である。現在年少1学級、年長2学級を合わせて55名の園児数であり、園児の減少に伴い、集団で育む保育の維持が課題である。

2 主題設定理由

本園児は遊びを好み、快活で素直である。一方「相手の思いに気付けない」、「集団遊びを長く続けられない」等、人とのかかわり方に課題が見られた。また遊びにおいて、試行錯誤を繰り返しながら、遊びを発展させる様子も見られなかった。

そこで本園では、園児の発達段階を踏まえ、協同的な遊びに向かえるよう、環境構成の工夫や保育者の働きかけを行い、遊びを通して非認知能力の向上とその発展性を図れるように実践を行った。

3 研究の実際

協同的な遊びは「人間関係」、「規範意識」、「自立」の確立と「言語能力」の向上の4領域に関係があるだろうとの仮説により、生活調査（4領域、22項目の個人調査）を行い、環境構成の工夫や保育者の働きかけにより、協同的な遊びの要素（「遊びのイメージを共有している」等の4項目）とどのような関係があるのかを調査した。

(1)環境構成の工夫

園児が興味や関心をもち、かかわりたくなる環境や遊びの内容や遊ぶための十分な時間と場を確保する等、四つの手立てを設定した。

(2)教師の援助の工夫

園児が互いの良さに気付いたり、認め合っ

たりできる言葉掛け、遊びのイメージを引き出す動機付け等、四つの手立てを設定した。

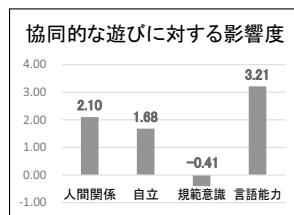
これらを実践しながら、園児一人一人の行動の変化を3年間記録し、協同的な遊びと4領域との関係を調べた。→結果の(1)

さらに平成30年度に保育を受けている小学校1年生の人間関係・言語能力等を調べるために小学校に追調査を依頼した。→結果の(2)

4 研究の結果

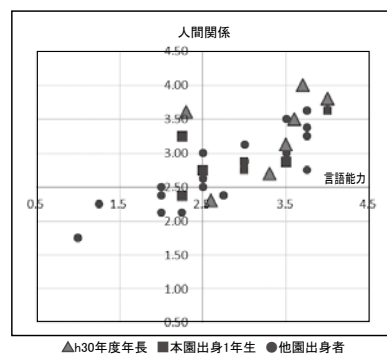
(1)重回帰分析から

協同的な遊びへの影響度が大きい因子は、言語能力、人間関係、自立、規範意識の順に高い。



(2)卒園生の調査から

約67%の児童が幼稚園で獲得した認知能力（言語能力）と非認知能力（人間関係）を維持している。



5 研究の成果

協同的な遊びにまで発展した幼児が増えたこと。また、在園中に身に付けた人間関係・言語能力を入学後も児童の約67%が保持していることの2点は、私たちに大きな勇気を与えた。なお、本研究の詳細は『第34号教育実践研究論文』2020年公益財団法人日本教育公務員弘済千葉支部発行の冊子を参照されたい。